

# 重い脊柱管狭窄症が胎盤エキス

## プラセンタで治った医師5人の緊急報告

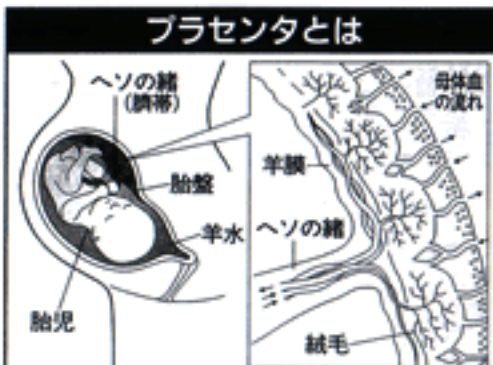
### 要手術の重い脊柱管狭窄症が プラセンタ注射で好転し、間欠性跛行まで治まる例が続出

#### プラセンタの薬剤を腰や足に注射する

腰部脊柱管狭窄症は、腰に起こる病気の中でも特に治療が困難とされています。実際、脊柱管狭窄症は、椎間板ヘルニアや変性すべり症が悪化した末路として起こる場合が多く、そのぶん治すのも難しくなるのです。そんな脊柱管狭窄症がさらに重症化すると、治療は並たいて

いではありません。重い脊柱管狭窄症の場合、鎮痛薬やビタミン剤の投与、神経ブロック（神経の周囲に局所麻酔薬を注射する治療法）、神経根ブロック（神経に直接、局所麻酔薬を注射する治療法）などの、いわゆる保存療法による治療では効果があまり望めないことが多いのです。こうした場合、一般的な整形外科では手術をすすめられますが、手術を受けたからといって必ずしも症状がよくなるわけではありません。術後に症状が残ったり数年後に再発したりするばかりか、手術前より痛みが悪化する人も少なくないのです。

脊症は非常にやっかいで、私は以前から何かいい治療法がないかと模索を続けてきました。そんな中で出会ったのが「プラセンタ療法」だったのです。プラセンタとは、哺乳動物の「胎盤」を意味し、一般に人間やアタの胎盤から抽出されたエキスのことをいいます。胎盤は、たった一個の受精卵を胎児に成長させる臓器で、ありとあらゆる栄養や生理活性物質（体の働きを活発にする物質）を豊富に含んでいます。そのため、七四〇の表のようにプラセンタには二〇もの薬理作用があるとされ、脊柱管狭窄症にも著効を発揮するのです。



プラセンタは、哺乳動物の胎盤、または、そこから抽出されるエキスのこと。胎盤は、胎児と母親を結んで胎児の生命を維持し成長を促す臓器。プラセンタには20もの薬理作用があり、脊柱管狭窄症にも著効を発揮する。

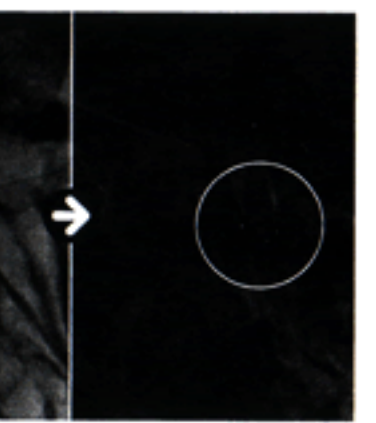
脊柱管狭窄症では、このプラセンタの薬剤を、痛みやしびれ



清水伸一先生

腰痛と左下肢痛、間欠性跛行（歩行障害）が起こり、近所の整形外科でMRI（磁気共鳴断層撮影）検査を受け、脊柱管狭窄症と診断されました。医師からは手術をすすめられましたが、もともと心筋梗塞を患っていたため、手術を拒否。家族が心配して別の治療法を探した結果、プラセンタ療法のことを知り、昨年の春に当院を訪れたのです。

ろには腰痛も左下肢痛、間欠性跛行も大幅に改善し、歩ける距離も延びました。現在も状態は非常に安定しており、旅行を楽しめるようになっていきます。



記事で紹介した76歳の女性の腰椎周辺のMRI画像。左は治療前で、右が9ヵ月後。障害された馬尾神経が修復されている。

早急プラセンタの注射を行ったところ、ふさぎ込んでいた気分が少し明るくなり、二回目の治療後には重だるかった体が軽くなったそうです。そうしてプラセンタ療法を中心とする治療を重ねるのに伴い、腰痛や左下肢痛もみるみる改善していきました。そして、三ヵ月がたつこ

二つめは七十二歳の男性の症例です。この男性は、中学校の教師をしていた四十代のころから椎間板ヘルニアを患い、そこから移行して脊柱管狭窄症を発症したようです。腰痛と右下肢痛がひどく、発症当時は、近くの整形外科で神経根ブロックを受けていました。しかし、注射による疼痛がたつらく、すぐにやめてしまいました。

週間に二回のペースで、腰や太もものツボやトリガーポイントにプラセンタ注射を行いました。すると、六ヵ月後には腰と足の痛みはほぼ解消し、痛みを感じずに歩けるようになりました。男性は、「シルバーカーナシで同窓会に出席できたのがうれしい」と話しています。



プラセンタ注射を行う清水先生

それからはいい治療法を求めて日本全国の病院を回ったものの、どこへ行っても手術をすすめられ、しかも「手術をしても改善するとはかぎらない」ともいわれ、落ち込んでいました。家族のすすめでその男性が当院を訪れたのは二年前のこと。私はほかの治療も行いつつ、一

三ヵ月で間欠性跛行が改善し歩行距離が増加